

第 I 章 序 言

1 調査の経緯

国宝薬師寺東塔（以下、東塔と略称）は、薬師寺が奈良時代に平城京へ移されてから現在まで伝わる貴重な建造物である。三重塔でありながら、各層に裳階と呼ばれる差し掛けが取り付く構造は、他に例を見ない建築形式である。平成 21 年（2009）7 月に着手した保存修理事業はいったん建物をすべて解体し、破損部材の取り替えや補修などをおこなう解体修理である。現状の基壇は、明治 31～33 年（1898～1900）におこなわれた修理の際に外装が一新され、さらに昭和 25～27 年（1950～1952）の修理においても建物外部の敷石の多くが取り替えられている。また近年、基壇外装や敷石の補修などを数回おこなっているが、いずれの際にも本格的な調査はおこなわれてこなかった。

保存修理
事業

保存修理事業に際しては、創建当初の基壇の規模や構造、材料などを調査し、基壇外装の旧状の確認および後世の改変履歴をあきらかにし、東塔の変遷を解明するため発掘調査をおこなうこととした。加えて、不同沈下が著しい礎石の沈下原因を解明し、修理方法についての検討材料を得ることなども発掘調査の目的とした。保存修理事業にともなう発掘調査に際し、国宝薬師寺東塔保存修理事業専門委員会（委員長：鈴木嘉吉 元奈良国立文化財研究所 所長）の下に発掘調査に係る臨時委員会（以下、臨時委員会）を設置し、松村恵司（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 所長(当時)）、菅谷文則（奈良県立橿原考古学研究所 所長(当時)）に委員を委嘱した。発掘調査は、奈良県教育委員会事務局文化財保存事務所（現 奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存事務所）から委託を受けた独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所（以下、奈文研）ならびに奈良県立橿原考古学研究所（以下、橿考研）が実施した。

臨時委員会

発掘調査は、まず平成 26 年度に基壇全面とその周囲について実施した（奈文研平成第 536 次調査、橿考研 014039）。その際、発掘前の基壇外装材および敷石は、写真撮影および図面作成などの記録化をおこなった上ですべて取り外した。つづいて平成 27 年度には、代替地盤支持杭打設にともなう事前発掘調査を実施した（奈文研平成第 554 次調査、橿考研 015034）。当該調査は、平成 26 年度の調査区内にトレンチを設定し、掘込地業の規模と構造や後世の修理にともなう足場、その他遺構の存否の把握、ならびに整地土および伽藍造営前の堆積土の検出などを目的とした調査をおこなった。令和 2 年度は、平成 26・27 年度の調査において、保存修理事業のための素屋根基礎の下に位置していたため調査ができなかった北面・南面階段の北端・南端部分の発掘調査を実施した（奈文研平成第 622 次調査、橿考研 020021）。当該調査は、①北面・南面階段の地覆石、踏石の位置を確認し、階段規模および構造の解明、②階段周囲の犬走り、雨落溝などの施設の有無の確認、③東塔周囲の各時代の修理などにともなう痕跡の確認を主な目的として調査をおこなった。

平成 26・27
年 度

令和 2 年度

（青木・米川・前川・丹羽）

2 東塔の沿革と建築構造について

A 薬師寺の開創と東塔の建立

本薬師寺 薬師寺は、天武天皇9年(680)に皇后(のちの持統天皇)の病氣平癒を祈願して、天武天皇が発願した寺院である。これが藤原京の薬師寺で、現在は本薬師寺と呼ばれ、橿原市城殿町に東西両塔および金堂の土壇が残る。その後、和銅3年(710)の平城遷都にともない薬師寺も平城京右京六条二坊に寺地を移した。

東塔建立 平城京における薬師寺造営は、長和4年(1015)に書かれた『薬師寺縁起』に詳しく、養老2年(718)に伽藍を移すとの記載がある。さらに発掘調査により、東僧房北方の井戸から霊亀2年(716)の年紀のある木簡が、本薬師寺式の瓦や奈良時代初頭の土器などとともに出土したことから、この頃には薬師寺の造営が開始されていたとされる。なお東塔については、『七代寺年表』(平安時代後期)や『扶桑略記』(平安時代後期)などの記述から天平2年(730)に建立されたとみられる¹⁾。

B 東塔修理の歴史

平安時代 東塔の修理の沿革は創建以降の修理に関わる遺構を解明する上で重要である。そのため文献や文字瓦・墨書などをもとに、東塔修理に関連する可能性のある薬師寺の被災・修理の概略を述べたい(Tab. 1)²⁾。まず薬師寺における大きな被災は天禄4年(973)の火災で、金堂と東西両塔を除く伽藍の建物がすべて失われた(『薬師寺縁起』)。順次、伽藍の建物が再建されたが、東塔の修理についてはあきらかではない。

鎌倉時代 鎌倉時代の南都諸寺の復興と同じく、薬師寺では建仁元年(1201)に興福寺円源が薬師寺修造功で律師に任ぜられており(『興福寺別当次第』)、伽藍の修理がおこなわれたようである。また『南無阿弥陀仏作善集』結縁の項に薬師寺塔とあり、この塔が東塔であるか不明であるが、修理がおこなわれた可能性がある。仁治3年(1242)を示す「任治壬寅」の銘のある出土軒平瓦があることが知られ、瓦の葺替があったとみられる。さらに弘安8年(1285)には現在の東院堂が建立されており、13世紀を通じて伽藍の整備が続いた。また康安元年(1361)には、地震によって、東西両塔の1基の九輪が落ち、他はゆがんだというが(『嘉元記』)、東塔の被害は定かではない³⁾。

天文修理 伽藍を一変させたのは享禄元年(1528)の兵火で、これによって東塔と東院堂を除き、伽藍のほとんどの堂舎が焼失し、西塔もこの時に失われた(『薬師寺志』)。さらに天文8年(1539)の大風により、諸堂が被害を受け、これ以降12年かけて、順次修理したというが(『中下藤集会評定』)、東塔に関する修理の有無は不明である。

寛永・正保修理 その後、郡山藩主本多政勝によって寛永21年～正保3年(1644～1646)に修理がおこなわれた(『薬師寺縁起国史』)。この時、破損が著しかった塔内の成道八相の塑像が撤去され、四天柱間の須弥壇が造り付けられたことが知られ、須弥壇框金具に正保2年・同3年の刻銘が確認できる。この時に根継石を挿入し、心柱周辺の修理がおこなわれたと推察される。後述(第Ⅲ

Tab. 1 薬師寺東塔の被災・修理の略歴

年号	破損・修理の内容
天禄4年(973)	食堂付近より出火、講堂、僧房、回廊、経蔵、鐘楼、中門、南大門など焼失。金堂、東西両塔は焼失を免れる。
建仁元年(1201)	薬師寺伽藍の修理の功により、興福寺円源が律師に任じられる。
仁治3年(1242)	東塔の瓦の葺替。
康安元年(1361)	地震で金堂の二階が傾き、東西両塔の1基は九輪が落ち、他はゆがむ。
文安2年(1445)	大風で被害を受けたと推定。金堂、南大門は倒壊。
享禄元年(1528)	兵火によって金堂、講堂、中門、西塔などが焼失。東塔は火災を免れる。
慶長元年(1596)	慶長伏見地震。
寛永20年(1643)	塔全体が北東へ2～3尺傾斜(上記の地震が原因と推定される)。
寛永21年(1644)	郡山藩主本多政勝によって修理される(寛永・正保修理)。
宝永4年(1707)	大地震。九輪が折れる。
天明3年(1783)	修理。
文化5年(1808)	露盤修理。
嘉永7年(1854)	大地震。相輪傾斜。
安政3年(1856)	相輪の建て起こし。露盤・心柱修理(安政修理)。
明治31～33年(1898～1900)	解体修理(明治修理)。
昭和25～27年(1950～1952)	屋根葺替および部分修理(昭和修理)。
昭和39～40年(1964～1965)	彩色剥落止め。
昭和51年(1976)	西塔基壇の全面発掘調査。
平成3年(1991)	敷石の取り替え。
平成17年(2005)	心柱の応急補強工事。
平成21年(2009)	保存修理事業に着手。

章2)の東塔の乱石積基壇の整備もこの頃のものであろうか。

このほか、宝永4年(1707)には地震により九輪が破損したことが知られ(『薬師寺文書』)、修理がうかがえる。また二重四天柱(長束)には大工銘と天明3年(1783)の年紀があり、修理がおこなわれたことが確認できる⁴⁾。さらに文化4年(1807)の東塔修理の願書があり、ここには垂木先の切縮めや相輪の傾きに関して記されるが(薬師寺古記録)、詳らかではない。

さらに嘉永7年(1854)の安政地震直後の安政3年(1856)には相輪の建て起こしや心柱の修理をおこなったといい(『薬師寺日記』)、正面側(西側)の基壇外装の花崗岩での整備はこの頃のものと考えられる。

近代以降は、明治30年(1897)に古社寺保存法が施行され、これにもとづき、明治31～33年に、技師関野貞、技手藤本民次郎により、大規模な解体修理がおこなわれた。修理は裳階の解体、裳階柱礎石の据直し、柱の根継、基壇外装の再整備など、広範におよんだ⁵⁾。

戦後には、昭和25～27年(1950～1952)にかけて、屋根葺替および相輪の補修がおこなわれ⁶⁾、昭和39年には彩色の剥落止め処理、平成2年には敷石の取り替え、平成17年には心柱の応急補強工事がおこなわれた。そして、平成21年から保存修理事業が開始し、平成26・27年の発掘調査を経て、令和2年に木部の修理を終え、東塔南北面の階段付近の発掘調査をおこなった。

C 東塔の建築構造

東塔の上部の構造については、『国宝 薬師寺東塔修理工事報告書』[本文編]で詳しく述べるが、平面形式、組物・軒の出などの上部構造は基礎や発掘遺構と密接に関連する。そのため、ここでは発掘調査に関係の深い東塔の建築構造に絞り、その概要について以下にまとめる。

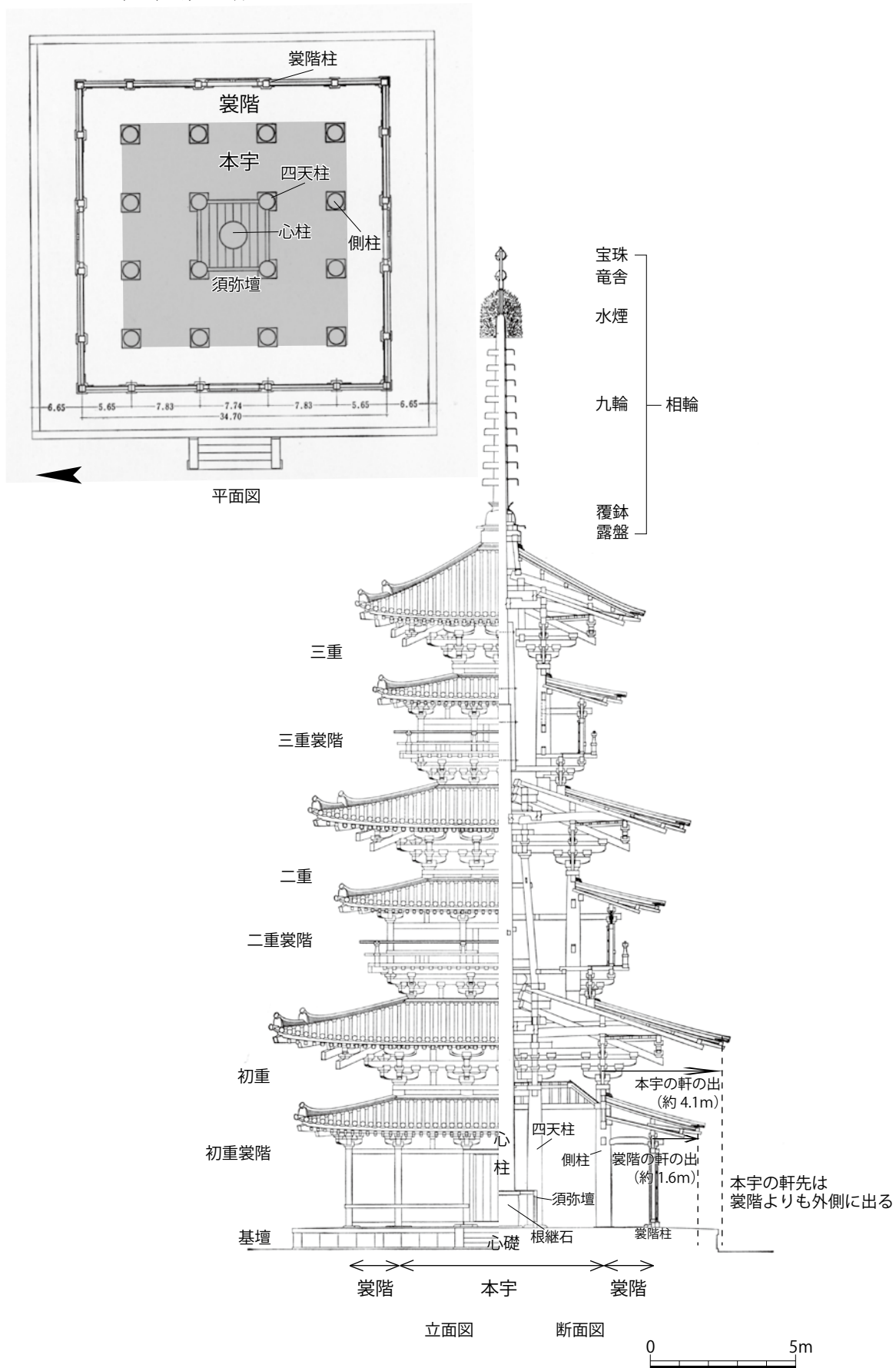


Fig. 1 東塔の各部名称 平面図・断面図・立面図 1 : 200⁷⁾

構造形式 東塔の構造形式は、三間三重塔婆、每重裳階付き、本瓦葺である（Fig. 1）。初重の規模は、本宇は方三間で、7.090 m四方、裳階 10.514 m四方、総高 34.133 mで、相輪の高さは 10.341 mである。

平面形式 中心に心柱を立て、四天柱と側廻りに方三間の柱を配置し、これを本宇とする。これらの本宇では柱を丸柱とする。また本宇の四周に裳階が廻り、この柱を角柱とする。足元の柱径は本宇柱で径約 53cm、裳階柱で約 23cm角、柱間寸法は本宇が約 2.4 m等間、本宇から裳階の出は約 1.7 m⁸⁾。本宇の中央、四天柱の内側に須弥壇を設け、裳階各面の中央間に外開きの板扉を入れ、脇間・端間は白塗り壁とする（Fig. 1）。

組物と軒の出 各重とも本宇は三手先とし、裳階は平三斗とする。軒は二軒で、地垂木を円形、飛椽垂木を角形の地円飛角とする。初重の軒の出は、本宇側柱心から本宇が約 4.1 m、裳階が約 3.3 mであり、軒先は初重の裳階よりも本宇のほうが外側に出る⁹⁾。

以上が発掘調査に関連する上部構造である。東塔の修理・改造・補修部位などの履歴については、保存修理事業を通じた調査を参照されたい。（海野）

註

- 1) 東塔については、平城京で新たに建設されたとする説（非移建説）と藤原京の本薬師寺に建てた塔を平城京に移築したとする説（移建説）の二説が唱えられてきた。この薬師寺移建・非移建論争の経緯は、本書の主旨から外れるため、論争の概略を記した藤井恵介の論考を参照されたい。藤井恵介「薬師寺の建築」『薬師寺』里文出版、1990年。
- 2) 太田 博太郎の編年の整理やその他の薬師寺関連の史料を参照した。太田 博太郎「薬師寺の歴史」『薬師寺』奈良六大寺大観第六巻、岩波書店、1970年。伊藤延男「東塔」『薬師寺』奈良六大寺大観第六巻、岩波書店、1970年。太田 博太郎『南都七大寺の歴史と年表』岩波書店、1979年。
- 3) 薬師寺東塔初層の本宇の側柱を貫通する1段目貫の挿入なども、中世以降の改修によるものと推察される。
- 4) 奈良県教育委員会文化財保存課『薬師寺東塔及び南門修理工事報告書』1956年。
- 5) 浅野 清が薬師寺西塔の再建にあたり、明治期の修理の痕跡を整理している。浅野 清『薬師寺東塔に関する調査報告書』薬師寺、1981年。
- 6) 前掲註4報告。
- 7) 太田博太郎ほか編『日本建築史基礎資料集成』11、塔婆Ⅰ、中央公論美術出版、1984年。より転載し、一部改変。
- 8) 本宇柱と裳階柱の距離は約 1.7 m、裳階柱から裳階の軒の出は約 1.6 mである。なお裳階が本宇の軒内に納まる事例は、古代建築のなかでも古く、時代が下るにしたがって、本宇よりも裳階の軒先が外に出る事例が増えることが知られる。海野 聡「古代における裳階の類型化と二重金堂の変遷に関する試論」『佛教藝術』第 327 号、2013 年。
- 9) 浅野 清が詳細な寸法の検討をおこなっており、今回の解体修理においてもさらなる検討がされる（前掲註5文献）。しかし、本書では発掘遺構との整合性が問題となるため、既存の調査成果にもとに、発掘遺構の精度に合わせ、以下、10cm単位の精度にとどめておく。なお、この本宇と裳階の軒の出は、後述の礎石と雨落溝の位置と関係する。

付記 本研究は科学研究費補助金 基盤研究（B）「古代東アジアにおける建築技術体系・技術伝播の解明と日本建築の特質」（JP18H01618）、挑戦的研究（萌芽）「建築メンテナンスの歴史学の構築に関する基礎的研究」（JP18K18904）（ともに研究代表者海野聡）の成果の一部を含む。

3 西塔の発掘調査所見

- 東塔と一対をなす西塔は、昭和 51 年（1976）に基壇全面の発掘調査がおこなわれ¹⁾、基壇
- 心 礎 の規模が一辺 13.7 m、高さ 1.3 m と判明している（Fig. 2）。心礎は飛鳥周辺で産出する石英閃緑岩（通称飛鳥石）で、長径 2.7 m、短径 1.9 m、厚さ 0.9 m 以上、上面に方形柱座を造り出し、
- 基 壇 外 装 中央に三重の円孔を同心円状に彫り込んだ舍利孔を設ける。基壇外装は、長さ 50 ～ 90cm、幅・高さとも 30 ～ 50cm の花崗岩製地覆石の上に、厚さ 30cm ほどの凝灰岩製羽目石を置く（Fig. 3）。基壇上面の敷石はまったく残っていなかったが、昭和 9 年の調査の際には、凝灰岩製敷石 3 点が当初の位置を保っていたと報告されている。
- 地 山 西塔基壇の地山はバラス層であり、その上に自然堆積層である灰色砂層（厚さ 30 ～ 40cm）、さらに粘質土層と砂層が薄く堆積し、旧地表面は凹凸が多かったとされる。基壇は、掘込地業をもたずに旧地表面上に直接版築したとされ、心礎直下には粘質土と砂利を交互に突き固めた高さ 40cm ほどの円丘状盛土地業を設けていた。その後、基壇周囲に厚さ 20cm ほど整地してから、砂質土と粘質土とを交互に版築し、基壇を構築する。
- 礎 石 礎石はわずかしが残っていなかったが、四天柱・側柱礎石とも一辺 1.5 ～ 2.0 m の方形を呈
- 基 壇 外 周 する据付穴を基壇版築終了後に基壇上面から掘削したと推定される。基壇外周では、基壇外装の外側で長径 20 ～ 30cm の玉石敷の犬走りが 60cm ほどの幅で巡り、さらに外側には幅 50 ～ 60cm、深さ 7 ～ 8 cm の乱石組雨落溝が取り付く。（青木）

註

- 1) 『薬師寺報告』。
- 2) 前掲註 1 報告。

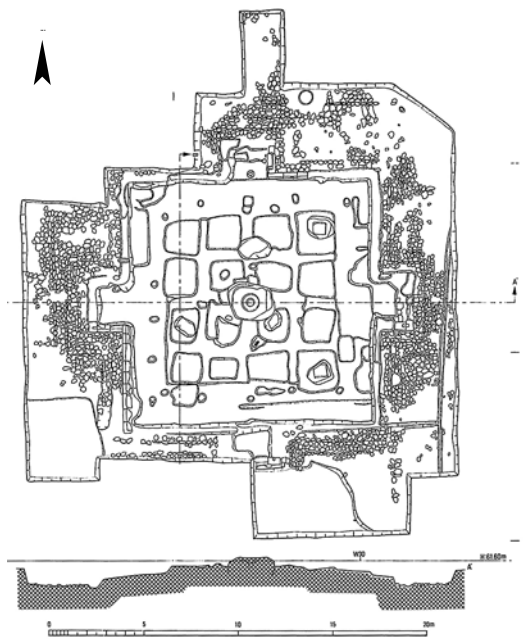


Fig. 2 西塔基壇平面・断面図 1 : 400²⁾



Fig. 3 西塔の基壇外装（西面南半、南から）

4 調査組織

本発掘調査は、先述の通り、奈良県文化財保存事務所から委託を受けた奈文研、ならびに橿考研が共同で実施したものである。奈文研・橿考研それぞれで調査次数を付した。

奈良文化財研究所

調査次数	年 度	所 長	都城発掘調査部長	調査担当
536	平成 26 (2014)	松村恵司	小野健吉	青木 敬
554	平成 27 (2015)	松村恵司	渡辺晃宏	青木 敬
622	令和 2 (2020)	松村恵司	箱崎和久	前川 歩

奈良県立橿原考古学研究所

調査番号	年 度	所 長	調査部長	調査担当
014039	平成 26 (2014)	菅谷文則	宮原晋一	米川裕治
015034	平成 27 (2015)	菅谷文則	宮原晋一	米川裕治
020021	令和 2 (2020)	青柳正規	川上洋一	米川裕治

平成 26・27 年度の調査は、青木 敬（奈文研）、米川裕治（橿考研）が担当し、佐々木 芽衣（橿考研）が参加した。また、森脇智子（橿考研）、河村 卓（帝塚山大学大学院）、道上祥武（大阪市立大学大学院）、馬 兆中・王 雅寧・新田宏子（以上、京都大学大学院）、内野太郎・高 俊（以上、京都工芸繊維大学大学院）、高左右 裕・岡 紗佑里・土橋 明梨沙（以上、奈良大学大学院）、白石華子（京都大学）、金子松 美香・園原悠斗・土井湧輝（以上、立命館大学）の協力を得た。

令和 2 年度の調査は、前川 歩（奈文研）、米川裕治（橿考研）が担当し、大澤正吾・浦 蓉子・岩永 玲（以上、奈文研）、漆原尚輝（橿考研）が参加した。また、森脇智子の協力を得た（所属はいずれも調査時）。

（丹羽・米川）

5 報告書の作成

報告書の作成は、主に奈文研都城発掘調査部平城地区にておこない、発掘調査終了後の平成27年度から開始した。平成28年(2016)3月には、『薬師寺東塔基壇 国宝薬師寺東塔保存修理事業にともなう発掘調査概報』(以下、『概報』)を刊行し、平成26・27年度の調査の概要を報告した。また、『奈良文化財研究所紀要2015』、『奈良文化財研究所紀要2016』、『奈良文化財研究所紀要2021』でも各年度の調査の概要を報告した。

遺構の整理・検討は調査担当者、および奈文研都城発掘調査部遺構研究室が中心となっておこない、遺物の整理は、金属製品・銭貨・冶金関連遺物・木製品・石製品・ガラス製品・種実を考古第一研究室、土器・土製品・陶磁器類・壁土を考古第二研究室、瓦磚類・石材を考古第三研究室が中心となって整理を進めた。発掘前の基壇敷石については平成27年5～7月・9月、出土石材については平成29年9月に、奈文研・榎考研関係者が中心となって、薬師寺現地にて実測図作成・写真撮影などの調査をおこなった。

1. 本書の執筆分担は以下のとおりである。各項目の文責は文末に付した(所属は令和2年度)。

第I章 序 言

- 1 調査の経緯:青木 敬(國學院大學・奈文研客員研究員(元奈文研))・米川裕治(榎考研)・前川 歩(奈文研)・丹羽崇史(奈文研)
- 2 東塔の沿革と建築構造について:海野 聡(東京大学(元奈文研))
- 3 西塔の発掘調査所見:青木 敬
- 4 調査組織:丹羽崇史・米川裕治
- 5 報告書の作成:丹羽崇史・米川裕治

第II章 調 査

- 1 調査の概要:青木 敬・米川裕治・前川 歩・丹羽崇史
- 2 発掘調査日誌抄:丹羽崇史

第III章 遺 構

- 1 基本層序:青木 敬・前川 歩
- 2 基壇:青木 敬・米川裕治・前川 歩・大澤正吾(奈文研)・今井晃樹(奈文研)
- 3 基壇外周:前川 歩・佐々木 芽衣(元榎考研嘱託)・青木 敬

第IV章 遺 物

- 1 瓦磚類:今井晃樹
- 2 土器・土製品・陶磁器類・壁土:丹羽崇史
- 3 金属製品・銭貨:国武貞克(奈文研)・丹羽崇史
- 4 石材:高田祐一(奈文研)
- 5 木製品・石製品・ガラス製品・植物種実・冶金関連遺物:
芝 康次郎(文化庁(元奈文研))・丹羽崇史

第V章 関連諸分野からの検討

- 1 東塔の探査:金田明大(奈文研)

- 2 東塔基壇および基壇外周の地質調査と放射性炭素年代測定の成果：

村田泰輔（奈文研）

- 3 矢穴形状からみた東塔出土大型石材の位置付け：高田祐一

- 4 東塔出土金属製品・銭貨・冶金関連遺物の自然科学分析：

丹羽崇史・杜之岩（復旦大学）・藤井 佐由里（京都大学大学院）

第Ⅵ章 考 察

- 1 基壇の変遷：青木 敬・米川裕治

- 2 基壇構築過程の復元：青木 敬・米川裕治・佐々木 芽衣

- 3 基壇および階段の復元：前川 歩

第Ⅶ章 結 語：丹羽崇史・青木 敬・米川裕治・佐々木 芽衣・前川 歩・大澤正吾・今井晃樹

English contents 作成：各執筆者・丹羽崇史

校閲：Yanase, Peter・庄田慎矢・Shaun, Mackey（以上、奈文研）

2. 図面・図版・挿図・表の作成にあたっては、以下の関係者の協力を得た。

遺構：奥山 彩央子・鎌田礼子・土井 智奈美・西村 真紀子・並河 由佳子・山川誠子（以上、奈文研）

瓦磚類：森下 しのぶ・山川誠子・北野智子（以上、奈文研）

土器・土製品・陶磁器類・冶金関連遺物：丸山美和・泉谷美幸・並河 由佳子（以上、奈文研）

金属製品・銭貨・木製品・石製品・ガラス製品・植物種実：坂上 加江子（奈文研）・鎌谷涼平（臼杵市役所）・坂本直也（熊本市立熊本博物館）

石材：山川誠子・森脇智子・新尺雅弘（大阪府教育庁文化財保護課）・鈴木知怜（長岡京市教育委員会）・高岡桃子（奈良市埋蔵文化財調査センター）・松澤健太（奈良大学卒業生）

3. 遺構・遺物の写真は、中村一郎・栗山雅夫・飯田 ゆりあ・鎌倉綾（以上、奈文研）、杉本和樹（文化財写真技師）、および調査担当者が撮影した。X線透過画像は、脇谷 草一郎・柳田明進（以上、奈文研）・杜之岩・藤井 佐由里が撮影した。

4. 奈文研の刊行物については、以下のように略称を用いている。

『奈良文化財研究所紀要 2013』 → 『紀要 2013』

奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告』 → 『薬師寺報告』
奈良国立文化財研究所学報第四十五冊、1987 年

5. 発掘遺構図の座標値は、世界測地系（平面直角座標系第Ⅵ系）による。

6. 発掘遺構は、遺構の種別を示す以下の記号と、一連の番号の組み合わせによる遺構番号で表記した。本書の遺構番号は、奈文研都城発掘調査部遺構研究室が設定した地区割図をもとに、平城京右京の遺構番号台帳にもとづいた通し番号となっている。

S D（溝）、S K（土坑）、S X（その他）

7. 基壇上の礎石の呼称として、西南隅礎石を起点として、南から北へ「い」・「ろ」・「は」・「に」・「ほ」・「へ」、西から東へ「一」・「二」・「三」・「四」・「五」・「六」と番付を与える（Fig. 4）。
8. 調査時に計測した各土層の土壤硬度は、藤原製作所製山中式土壤硬度計No. 351 を使用し、同硬度計の硬度指数目盛にしたがい、計測値の単位はmm表記とした。

9. 創建時・近世の基壇外装および礎石、ならびに出土遺物として取り上げた石材の鑑定は脇谷 草一郎がおこなった。鑑定は肉眼観察にもとづく。鑑定結果については、PLAN11、および第IV章4に掲載した。

10. 調査区の探査・計測は金田明大、基壇版築層の土層転写などは脇谷 草一郎・田村朋美（奈文研）、奥山誠義・柳田明進・鶴 真美（以上、檀考研）、調査区の土壌環境ならびに災害痕跡などの分析は、小

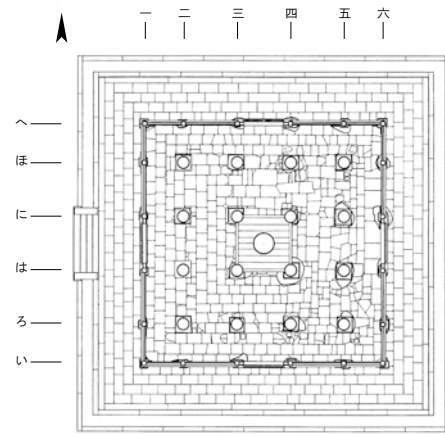


Fig. 4 柱・礎石番付図

- 池伸彦（奈文研）・村田泰輔が担当した。探査の結果は第V章1、土壌環境の分析結果は第V章2に掲載した。建築からみた東塔の所見ならびに修理履歴の概要については、海野 聡（奈文研）が担当し、第I章2に掲載した（所属はいずれも調査時）。
11. 基壇ならびに基壇外周で出土した炭化物のAMS年代測定は、株式会社パレオ・ラボに委託し、測定の結果は第V章2に掲載した。
12. 金属製品・銭貨・冶金関連遺物の蛍光X線分析については、奈文研埋蔵文化財センター保存修復科学研究室にて、脇谷 草一郎・柳田明進・丹羽崇史の協議の上で実施した。機器の操作は杜 之岩・藤井 佐由里がおこなった。結果は第V章4に掲載した。
13. 奈良県文化財保存事務所の指針により、裳階に対する塔の中心部は、本書では本宇と呼称する。
14. 本報告書の用語は、考古学で一般的に用いる表記を優先したため、『国宝 薬師寺東塔修理工事報告書』[本文編]と一部異なる表記がある。
15. 本書中での人名は基本的に敬称を省略した。
16. 本書の編集は、国宝薬師寺東塔保存修理事業専門委員会の下に設置された発掘調査に係わる臨時委員会ならびに渡辺晃宏（奈文研都城発掘調査部副部長（令和元年度まで））、箱崎和久（奈文研都城発掘調査部部長）、宮原晋一（檀考研調査部長（平成29年度まで））、岡林孝作（檀考研調査部長（平成30年度～令和元年度））、川上洋一（檀考研調査部長（令和2年度））の指導のもと、丹羽崇史・米川裕治がおこなった。編集に際して、土井 智奈美の協力を得た。

謝 辞 発掘調査、ならびに報告書作成にあたり、以下の機関・個人の方々よりご教示・ご協力を得た（五十音順・敬称略）。

高槻市しろあと歴史館

奥田 尚、小澤 毅、亀田修一、佐川正敏、佐藤亜聖、三宮千佳、十文字 健、田辺征夫、中島和彦、藤川祐作、森岡秀人、山中敏史

（丹羽・米川）